母親の子離れのプロセスについて

The Processes of Mothers' Acknowledgment of Their Children's Independence

鴻上 亮子
KOKAMI Ryoko

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：子離れ，促進的要因，自尊感情
Key words：Children's Independence, Guiding Factors, Self-esteem

１．問題と目的

親子関係の問題の一つとして，子離れができない親の問題が指摘されている．たとえば，高石（2012）は，我が子の履修，交友関係，進路選択，就職先などに関心を払い続け，思うような結果が得られないと，大学側に対応を求める親が増えていると述べている．また中野（2003）は，有名校への進学の促進や様々な才能教育の提供などについて，親のペースで我が子を上手に調整しようとし，子どもの自然な分離をコントロールしようとする親の増加を指摘している．

子離れは一朝一夕で行われるものではなく，村本（2010）が指摘するように，巣立ちは子どもの分離―固体化のエピソードとして比較的早い時期から感じられるものであり，徐々に進行していくプロセスである．しかしながら，子離れの様相を母親の語りから探った研究（渡邊・恒吉：2015，濤岡：2020）はあるものの，子離れを過程として捉え，それを時間軸で追った研究はこれまでに見当たらない．

そこで本研究では，子離れを単なる親子関係の状態ではなく，一連の親子関係の過程とし，子離れの様相を親子関係の過程における親の自己にまつわる現象的過程として捉えた．その上で，「われわれの行動は多くの場合，自尊心を維持し，低下しないように，あるいは，高揚するように動機づけられている」という中村（1990）の自己過程の考え方を援用した．また自尊心を自尊感情という言葉に統一し，その定義を「一般にある基準より優れているか劣っているかの段階にとどまるのではなく，自分としてはそれで満足できるのかどうかにまで展開する，自己の現状に満足し，自信をもつ程度」とし，岡田（2017）の「親が子どもをあたかも自分と同じ価値観や気持ちを持つ自分の分身であり，自分自身の理想像を満たしていく存在であると捉えること」という「親から子どもへの同一視」という要因を加えることによって理論的な繋がりの明確化を試みた．

本研究の第一の目的を，母親たちの子離れのプロセスを時間軸で追い，その多様性と共通性を明らかにし，子離れに影響を与える要因を追究し，さらに子離れの先を探ることとした．第二の目的を，母親の子離れのプロセスと母親の自尊感情及び子どもへの同一視との関連性を探ることとした．

２．方法

＜調査対象者＞20 歳前後の子どもを持つ母親３名（平均年齢 50.6 歳）

Table1 調査対象者の概要

	年齢	対象者の職業	こどもに関する				
			年齢	性別	職業	きょうだい関係	住居形態
A	57	HR講師	22	男	社会人	3人きょうだいの長子	親と同居
B	53	通訳案内士	22	女	社会人	3人きょうだいの長子	親と同居
C	47	訪問介護事業所勤務、サービス介護責任者	21	男	大学生	3人きょうだいの長子	親・祖父の祖母と同居

＜調査期間＞2021 年 5 月～2021 年 12 月
＜調査方法＞半構造化面接法によるビデオ通話でのインタビュー調査を 1 名に対して 4 回（平均２時間）
＜調査内容＞子離れを感じたエピソード，その時に感じたことやそうなった理由について語ってもらった．
＜分析方法＞時間の流れに沿って母親の子離れのプロセスを検討するために，本研究では複線径路・等至性アプローチ（Trajectory Equifinality

Approach: 以下 TEA）による質的分析を用いた．

尚，本研究は大妻女子大学研究倫理審査委員会の承認（番号 : 03-001）を得て実施された．また，大妻女子大学人間生活文化研究所令和３年度大学院生研究助成(B)（課題番号: DB2109）より助成を受け行なった．

３．結果と考察

まず，面接内容から，母親たちにとって子離れとは，子どもが社会人になることによる経済的，社会的な自立や，家を出ることによって物理的な距離ができたことに限定していないことが明らかになった．すなわち，母親たちにとって子離れとは，子どもが自分で問題解決ができることを認識し，親としての自分の役目や責任感の区切りを感じることと意味付けられており，子離れを実感した後でも心的な繋がりを感じていることが示唆された．

次に，分析の結果から，母親の子離れのプロセスは４つの時期からなることが明らかになった．すなわち，一つ目は，産後から子どもの学童期前期までの物理的精神的な「母子一体期」，二つ目は，親が護られた環境下で学童期後期から思春期の子どもの自立を促す一方で，芽生えた子どもの自己主張に苦慮し，子ども自身が学校生活の中で自己を育む「子どもの自立の準備期」，三つ目は，子どもの考えと親の考えが一致せず，葛藤の末，親が青年期の子どもとの考えや価値観の違いに気づく「子離れの準備期」，そして四つ目は，親が子どもの自立を認知した結果，自主性を尊重し，子どもに対する責任の区切りを実感し，個と個としての関係が築かれる「子離れ期」である．

また，４つの時期ごとで，子離れに影響を与える要因が明らかになった．まず，「母子一体期」では，学童期における大人に保護された環境下での子どもの自立の促進，「子どもの自立の準備期」では，子ども自身による学校生活や友人との交流を通しての能力の育み，「子離れの準備期」では，母親による青年期の子どもに対する個別性の認識と子どもの自立の見守り，その結果としての「子離れ期」における自立の認識，子どものきょうだいや親に対する客観視の認識，こうした子どもの自立と客観的な視点の獲得を認識した末の親による子どもの自立の尊重と親としての責任の区切り，そして母親自身の興味の対象の分野での自己研鑽である．さらに，母親が子どもに対する保護と自立の促進の間で葛藤する様相が示され，子離れ後に新たな親子関係が構築されることが明らかになった．

３名の母親たちが子どもに関連する事柄を決める際に，外的基準ではなく内的基準に従っていることが示された．自己決定の際，内的基準に従う比率が高い方が自尊感情を維持・高揚しやすいであろう．本研究の 3 名の母親は自尊感情が高いと考えられることから，自尊感情の高い母親は子離れへのスムーズな移行がしやすいことが示唆された．さらに，子どもが自分と異なる特性を持つことを認知する時期に及んだ際に，自尊感情が高い母親は自力で自己の評価を上げる見込みがあるために，自己の評価を上げる存在として子どもを用いる必要がないことから，子離れへのスムーズな移行がしやすいと考えられる．このことから，子離れを左右する要因としては「親から子どもへの同一視」ではなく，「子どもとの強い情緒的結合を基礎に，親が子どもをあたかも自分と同じ特性を持つ分身であると捉えること」が重要であると結論づけた．

４．今後の課題

本研究では 3 人の子どもを持つ母親の第一子の子離れについて検討した．2020 年の出生率（厚生労働省，2020）が 1.34 人という少子化の日本においては，高橋（1995）の述べるよう親の期待は過重になる可能性が高い．この点から 1 人や 2 人の子どもを持つ親の子離れのプロセスを検討することが，より一般的な母親の子離れのプロセスを明らかにすることに繋がるであろう．

また，母親が子離れをすることの逆の体験として，子離れできない体験に至る径路を仮説的に見出したが，その設定が妥当であるかどうかを検討する必要がある．それは，子離れができないことの子どもへの影響についての臨床的な示唆を得る上でも重要だと考えられる．ただし，母親の自尊感情との関連性も検討の対象としていることから，倫理的な配慮を十分に勘案して行わなければならないであろう．

主要参考文献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ(2012).複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例．立命館人間科学研究, 25, 95-107.

中村陽吉（編）(1990). 「自己過程」の社会心理学

東京大学出版会.
根ヶ山光一（2006).〈子別れ〉としての子育て．日本出版協会.